

2026年5月29日

オーストラリア、4月インフレ率は鈍化も、根強いインフレ圧力を確認(Asia Weekly)

～韓国や台湾の4月の半導体生産は堅調な動きが続いている～

経済調査部 主席エコノミスト 西濱 徹

(Tel: 050-5474-7495)

(経済指標の振り返り)

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
5/25(月)	(シンガポール)4月消費者物価(前年比)	+1.8%	+2.0%	+1.8%
	1-3月実質GDP(前年比・改定値)	+6.0%	+5.1%	+4.6%*
	(タイ)4月輸出(前年比)	+23.1%	+17.3%	+18.7%
	4月輸入(前年比)	+45.0%	+30.0%	+35.7%
5/26(火)	(シンガポール)4月鉱工業生産(前年比)	+17.6%	+12.0%	+9.2%
	(台湾)4月鉱工業生産(前年比)	+14.16%	--	+26.12%
5/27(水)	(オーストラリア)4月消費者物価(前年比)	+4.2%	+4.4%	+4.6%
	(ニュージーランド)金融政策委員会(政策金利)	2.25%	2.25%	2.25%
5/28(木)	(韓国)金融政策委員会(政策金利)	2.50%	2.50%	2.50%
5/29(金)	(韓国)4月鉱工業生産(前年比)	+1.5%	+2.2%	+3.9%
	(台湾)1-3月実質GDP(前年比・改定値)	+14.55%	--	+13.69%*

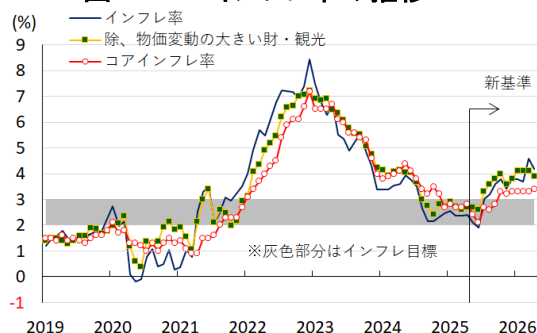
(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。*は速報値

[オーストラリア]～4月のインフレ率は鈍化も、コアインフレ率は加速、幅広いインフレ圧力の根強さを示唆～

27日に発表された4月の消費者物価指数は前年同月比+4.2%となり、前月(同+4.6%)から鈍化し、2カ月ぶりの低い伸びとなった。前月比も+0.35%と、前月(同+1.12%)から上昇ペースが鈍化している。これは、食料品価格の上昇に一服感がみられるほか、燃料税引き下げの影響を受けてエネルギー価格に下押し圧力がかかるなど、生活必需品を中心とした物価上昇圧力が後退したことによる。一方、同国ではトリム平均値(刈り込み平均値)ベースの物価指標をコアインフレ率としているが、当月は前年同月比+3.4%となり、前月(同+3.3%)からわずかに伸びが加速した。前月比も+0.3%と、前月(同+0.2%)から上昇ペースがやや加速している。エネルギー価格の下落を背景に輸送コストへ下押し圧力がかかる動きがみられるものの、原材料価格の上昇を反映して財価格が幅広く上昇しているほか、サービス価格も上昇基調で推移している。また、RBA(オーストラリア準備銀行)が月次ベースの物価統計において注視している「価格変動の大きい財」と観光関連を除いたベースでは、当月は前年同月比+3.9%となり、前月(同+4.1%)から伸びが鈍化した。しかし、いずれの指標もRBAが定める目標レンジ(2～3%)の上限を上回る推移が続い

ている。前月比は+0.33%と、前月（同+0.16%）から上昇ペースが加速しており、財・サービスを問わず幅広い分野でインフレ圧力が根強いことを示唆している。

図1 AU インフレ率の推移

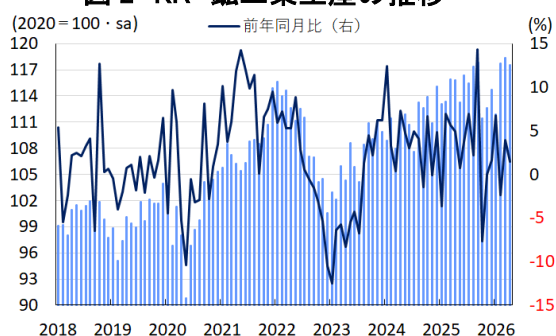


(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

[韓国]～半導体生産は引き続き堅調だが、中東情勢の緊迫化も影響して幅広い分野で生産が下振れ～

29日に発表された4月の鉱工業生産は前年同月比+1.5%となり、前月（同+3.9%）から伸びが鈍化した。前月比も▲0.7%と、前月（同+0.6%）から3ヵ月ぶりの減少に転じており、底入れの動きが続いてきた生産活動には一服感がみられる。分野別では、過去2ヵ月にわたり大幅な拡大が続いた鉱業部門で生産が減少に転じたほか、製造業や建設業に加え、サービス業でも生産が減少するなど、幅広い分野で生産の頭打ち感が強まっている。製造業では、主力輸出品である半導体など電子部品関連の生産が引き続き拡大している一方、自動車などの輸送用機械関連や電気機械関連の生産は軒並み減少している。さらに、中東情勢の緊迫化を受けた原油供給懸念の高まりを背景に、石油化学をはじめとする化学関連の生産が大きく下振れしているほか、生産財の供給不安が高まるなか、紡績関連や縫製品関連の生産も減少しており、幅広い分野の生産活動の重石となっている。

図2 KR 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

[台湾]～石油化学関連などで生産が大きく下振れするも、半導体など電子部品関連の生産は堅調に推移～

26日に発表された4月の鉱工業生産は前年同月比+14.16%となり、前月（同+26.12%）から伸びが鈍化した。前月比は+0.45%と、前月（同+0.02%）から3ヵ月連続で拡大しており、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど、持ち直しの動きが続いている。分野別にみると、コンピュータなど電気機械関連の生産が下振れしたほか、石油化学製品関連や医薬品関連の生産も大幅に鈍化した。一方、主力輸出品である半導体など電子部品関連の生産は底堅い動きを維持しているほか、金

属関連の生産も堅調に推移している。このため、分野ごとのばらつきが鮮明となっている。

29日に発表された1-3月期の実質GDP成長率(改定値)は前年同期比+14.55%となり、先月公表された速報値(同+13.69%)から上方修正された。前期比年率換算の成長率も+6.94%と、速報値(同+2.84%)から大幅に上方修正されている。世界的なAI(人工知能)関連投資の拡大に加え、トランプ関税の実質的な引き下げも追い風となり、輸出は拡大基調を維持している。また、企業部門による設備投資も引き続き旺盛に推移している。一方、中東情勢の緊迫化を受けた原油高を背景に、エネルギーなど生活必需品を中心とするインフレ圧力が高まっているものの、底堅い雇用環境が個人消費を下支えしているほか、政府消費も堅調に推移しており、景気全体を支えている。足元の景気は拡大の動きを強めているものの、在庫投資の成長率寄与度は前期比年率換算でマイナスと試算されるなど、在庫調整が進展している様子もうかがえる。こうしたなか、AI関連需要の堅調さを主な要因として、2026年通年の経済成長率見通しを+9.64%と、2月時点の見通し(+7.71%)から上方修正している。実現すれば、2010年以来の高成長となる見通しである。

図3 TW 鉱工業生産の推移

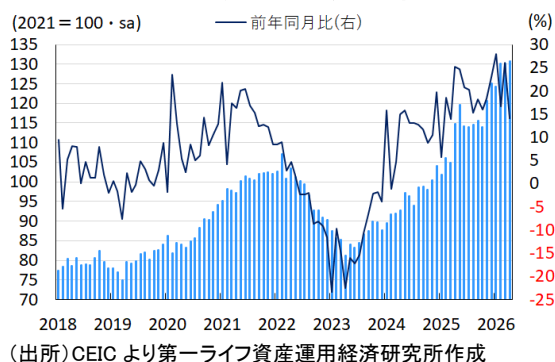
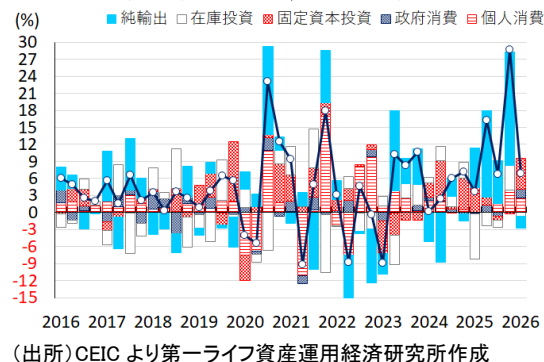


図4 TW 実質GDP成長率(前期比年率)の推移



[シンガポール]~1-3月GDP(改定値)は一転プラス成長、外需の堅調さが景気をけん引する展開が続く~

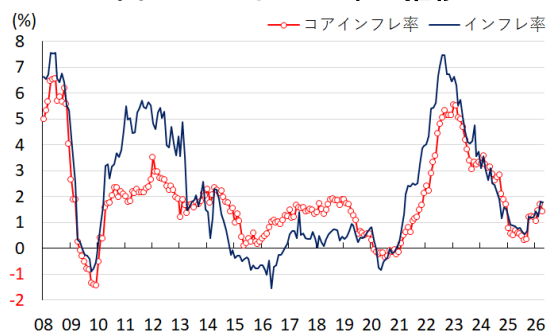
25日に発表された4月の消費者物価指数は前年同月比+1.8%となり、前月(同+1.8%)から2カ月連続で横ばいとなった。前月比は▲0.34%と、前月(同+0.48%)から3カ月ぶりの下落に転じているものの、中東情勢の緊迫化を背景とする原油高を反映してエネルギー価格は上昇している。また、穀物や生鮮食品を中心に食料品価格も上昇するなど、生活必需品を中心にインフレ圧力が強まる動きがみられる。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+1.4%となり、前月(同+1.7%)から上昇ペースは鈍化した。ただし、前月比は+0.15%と、前月(同+0.13%)からわずかに上昇ペースが加速している。エネルギー価格の上昇を反映して輸送コストには押し上げ圧力がかかる一方、金融市場では周辺国通貨の調整を受けてSGドルの名目実効為替レートが高止まりしており、輸入物価が抑制されるなかで、財価格は総じて落ち着いた推移をみせている。また、中東情勢を巡る不透明感の高まりを受けて、サービス価格には幅広く下押し圧力がかかっており、生活必需品の価格上昇を相殺する動きもみられる。

同日に発表された1-3月期の実質GDP成長率(改定値)は前年同期比+6.0%となり、先月公表された速報値(同+4.6%)から上方修正された。前期比年率ベースの成長率も+3.94%となり、速報値段階(同▲1.28%)ではマイナス成長であったものの、大幅な上方修正によりプラス成長が

続いていることが確認された。需要項目別にみると、インフレ加速による実質購買力の低下を背景に家計消費は鈍化しているほか、政府消費にも大幅な下押し圧力がかかっている。また、企業部門による設備投資には一服感がみられるものの、不動産投資や公共投資の進捗を反映して固定資本投資は押し上げられている。さらに、世界的なAI（人工知能）関連投資の拡大を背景に、半導体など電子部品関連を中心とする輸出は活発な動きを続けており、景気を下支えする展開が続いている。ただし、在庫投資の成長率寄与度は前期比年率ベースで+0.40ptと、3四半期連続でプラスとなっており、在庫の積み上がりが景気の下支え要因となっている点には留意が必要である。

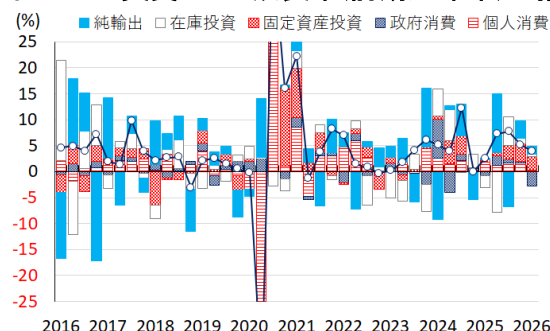
26日に発表された4月の鉱工業生産は前年同月比+17.6%となり、前月（同+9.2%）から伸びが加速した。前月比も+5.84%と、前月（同+3.48%）から2カ月連続で拡大しているほか、中期的な基調も拡大傾向で推移しており、持ち直しの動きが進んでいる。同国では、バイオ・医薬品関連の生産が月ごとに大きく変動し、生産全体を左右する傾向がある。こうしたなか、当月のバイオ・医薬品関連の生産は前月比▲39.34%となり、前月（同+15.49%）から2カ月ぶりの減少に転じた。一方、バイオ・医薬品関連を除いた生産は前月比+5.80%となり、前月（同+2.20%）から2カ月連続で拡大している。分野別では、電子部品関連や機械製品関連に加え、金属関連や化学製品関連など、輸出関連産業を中心に堅調な動きが確認されている。

図5 SG インフレ率の推移



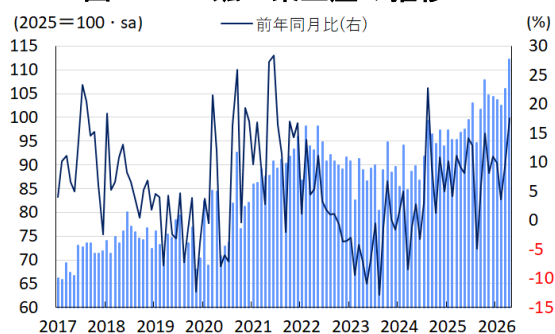
(出所)CEICより第一ライフ資産運用経済研究所作成

図6 SG 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移



(出所)CEICより第一ライフ資産運用経済研究所作成

図7 SG 鉱工業生産の推移



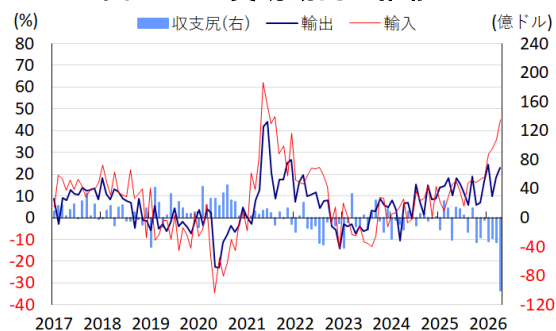
(出所)CEICより第一ライフ資産運用経済研究所作成

[タイ]～輸出は底堅さが続くも、原油高が輸入を大きく押し上げ、4月の貿易赤字は過去最大に～

25日に発表された4月の輸出額は前年同月比+24.1%となり、前月（同+18.7%）から伸びが加速した。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も2カ月連続で拡大しており、持ち直しの

動きが確認されている。財別にみると、石油製品関連の輸出には下押し圧力がかかる動きがみられる一方、世界的なAI（人工知能）関連投資の旺盛さを背景に、半導体をはじめとする電子部品関連のほか、自動車など輸送用機械や電気機械関連の輸出には底堅さがみられる。また、農産品関連の輸出拡大も全体を押し上げる要因となっている。国・地域別では、中東向け輸出が大きく下振れしたほか、ASEAN周辺国向けや米国向け、欧州向け、日本向け輸出にも頭打ち感がみられるものの、最大の輸出相手国である中国向け輸出は堅調さを維持している。一方、輸入額は前年同月比+45.0%となり、前月（同+35.7%）から伸びが加速した。前月比も10カ月連続で拡大していると試算されるなど、拡大基調を強めている。財別では、原油高を反映してエネルギー関連の輸入額が大きく押し上げられる一方、消費財関連や中間財関連の輸入は下振れするなど、対照的な動きがみられる。その結果、貿易収支は▲100.21億ドルとなり、前月（▲33.40億ドル）から赤字幅が大きく拡大した。単月ベースの赤字額としては過去最大となっている。

図8 TH 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一ライフ資産運用経済研究所作成

以上